



Be Creative



昔の人は言いました 令7卒業式式辞より抜粋

「若い時の苦勞は買ってでもせよ。」昔の賢人は言いました。でもね、思うんだよね。「いやいや、そうそう都合よく買えるものではない。」苦勞とはむしろ知らぬ間に背負い込んでいるか、あるいは巻き込まれてしまっているものなのかもしれぬ。

私にしてみれば、大学を卒業してからの5年間に渡る中学校での教員としての体験がそれだった。皆さんが生まれるはるか前のことです。しかしながら、「3年 B 組 金八先生」というドラマのことは知っている人もいでしょう。1970年ごろから、日本全国の中学校は等しく荒れて、中学生やその保護者、教師たちがその現実の中で苦しむ日々を送りました。このドラマは、その中学生や教師を励ますために、作家小山内美江子が作った作品であり、武田鉄矢扮する「金八先生」は一世を風靡することになります。「贈る言葉」という名曲も、このドラマを通して、生み出されました。

私が教師になったのは1980年。このドラマと歩みを共にすることになります。このドラマに描き出される事件は中学校に勤務していた私たちにとっては、日常茶飯事であり、しかも現実には「金八先生」はいないので、事件は50分で終わることなく、泥沼にはまり込む日々であった。頭痛すら経験のなかった自分であったはずなのに、胃がチクツと痛んで目が覚める日々が続いた。学校までの道のりは遠く、教室までのそれはさらに遠かった。一階の教室で授業をしていると、窓の外、一時間目には机が三階から降ってきて、五時間目には牛乳瓶がケースごと降ってきた。授業は私語との闘いであり、用意した授業プリントが紙吹雪と化したこともある。教師と生徒の喧嘩を止めに入った時、小さな私は生徒に間違われ、その喧嘩に巻き込まれていくことになる。苦しかった。しかしながら一番苦しかったのはきっと子どもたちだったろう。五年間で七つの中学校に赴任した。次の赴任校が決まった私に、やんちゃ坊主たちはこう言った。「あの学校の奴らはおれらよりすごいぜ。頑張ってやれよ。」

今、振り返ってみて、皮肉無くして、貴重な経験であったと思っている。その苦勞がわかっていて、承知して飛び込める世界ではなかった。何も知らなかったがゆえに行けたのであり、また、その時の私には、進む道はそれ一本のみ、ほかに選択の余地はなかった。こうしてみると何が苦勞で、何が財産になっていくのかわからない。とすれば、これも当たり前のことながら、目の前に存在する一つ一つのことごとに誠実にチャレンジしていくことこそが人の生きる道であるらしい。



買うべき苦勞とはどこか別のところにあるのではなく、むしろ自分の足元にあるのであろう。昔の人になり代わり、わたしならこう言う。「思わずしょいこんだ苦勞は、やがて、やがていつか、君の血となり、肉となる。」たくさんの間違いも繰り返すであろう。しかしながら、逆に多くのことも学ぶはずだ。私も同じ道りを歩いてきた。その延長線上に今の自分があり、こうして君たちとも出会えた。

「なぜか心騒ぐところなんだ、学校ってところは。」かつての卒業生が残した名言の通り、学校とは心騒ぐところでありたいと願う。卒業生みなさんに、価値ある

苦勞がたくさんありますように。そしてそこからかけがえのない幸せが生まれますように、心よりお祈りをして、私の式辞といたします。おめでとう！

卒業式は3年生の最後の授業と私たちは考えています。その最後の授業に何を語るのか、これは責任重大と、いつも緊張しながら考えるのが式辞です。特に、これでもうお別れをする3年生の皆さんへの、そして、厳しい社会の中に飛び立っていく3年生の皆さんへの言葉ゆえ、毎年、悩みながら、自分自身の生き方を問われるような思いで式辞を書いています。時に先人の言葉で、心に残ったものも使います。過去の式辞で言えば作家壇一雄の次の言葉でしょうか。まさに自由奔放に生きたこの人であるがゆえの印象深い言葉ゆえ、その時の式辞の一部とともに紹介いたします。

「お前たちの前途が、どうぞ多難でありますように。多難であればあるほど、実りは大きいのだから。」小説家である 壇一雄は自分の子どもたちにこんな言葉をおくった。私にはこんな言葉をおくる勇氣はとてもない。しかしながら、「人生に おいて起こりうるあらゆることを受け止め、誠実に向き合え」という教えに重なる言葉であるとすれば、波乱万丈に生きたこの人であるが、父親としての滋味深い言葉である。「ためらうな。おそれるな。悲しみをも享受出来るほどのイノチを鍛冶して自分の人生に立ち向かっていくがよい。」卒業、おめでとう。君たちにとって価値ある幸せがたくさんありますようにと心から祈ります。(2022年度卒業式式辞より)

私がこの学校に赴任してすぐのことだったと記憶します。国語の教科書の中に、壇一雄が自分の子どもたちに宛てた文章が掲載されていました。授業で扱うことはありませんでしたが、この「悲しみをも享受できるほどのイノチを鍛冶して自分の人生に立ち向かう」というフレーズは強烈に心にささったことを記憶しています。合わせて、卒業生にこの言葉を届けます。



Have a nice trip to Cambodia!



3月4日から一週間、2年生の臼井優星君、伊藤颯汰君、そして3年生の服部航世君がカンボジアに出発します。この旅は、GFSⅡ・Ⅲでの探究活動であるカンボジアへの教育支援活動に関わる学びの一貫として組まれた現地でのフィールドワークです。この2年間、この学びはパナソニック教育財団の特別研究指定校の認定を受ける中で活動をしてきました。協働研究校として共に協力をしあい、研鑽を深めてきた立命館守山高等学校の皆さんも

参加するスタディツアーです。立命館守山高等学校の皆さんとは、旅の途中であるベトナムハノイで待ち合わせとのこと。

「いよいよ明日からだね。」と臼井君、伊藤君に声をかけると、「はい、楽しみです。充実した取り組みになることを期待しています。」と元気な声が返ってきました。現地では、発表などの取り組みもあるようです。私も、日本から3人の生徒たちの頑張りを応援することとしましょう。



彼らが訪問をするシエムリアップ州には、世界遺産であるアンコールワットがあります。短い滞在期間ではありますが、ぜひ、カンボジアの文化・歴史も大いに学んで、意義深いフィールドワークにしてほしいと思っています。もちろん、英会話も頑張ってください！行ってらっしゃい！感想を楽しみにしています。